

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告

言語文化学科ドイツ語ドイツ文学専修課程3年 須藤駿介

**派遣先の基本情報**

国:ドイツ

都市:フライブルク

機関:フライブルク大学

形態:個人派遣

派遣期間:9/2~10/1

**研究課題**

啓蒙時代におけるドイツ演劇の展開と受容について

**(1)当初の計画の概要**

18世紀のドイツでは、それまで宮廷の娯楽行事であった演劇が、市民を教化するための媒体へと変容する。またそれも、単なるフランス古典悲劇の模倣から、次第にオリジナルな市民劇へと展開していく。その展開にはどのような道筋がみられ、それらはどのように市民に受容され、また演じられるための演劇として実際どのように演じられたかが研究の課題である。

**(2)実際に達成された成果**

研究対象となるドイツ語の研鑽をはかる目的でフライブルク大学の開催している秋期コースに参加した。平日の午前中には授業があり、文法や聞き取り、意見発表等の練習が与えられ、平日の午後や週末には他の参加者との交流もはかれる様々な催し物や遠足等があった。授業中に与えられる文法問題の類は難しくなかったが、聞き取りやスピーキングという点では困難を強いられた。他の参加者はほとんどがヨーロッパから来ているのだが、彼らは講師のいっていることをよく理解し積極的に発言をしており、その姿勢には感心させられ次第に自身も授業中に発言をするようになった。

平日午後や週末のレクリエーションでは、街の大聖堂で行われているオルガンコンサートを訪れたり、フランスのアルザス、シュヴァルツヴァルトやボーデン湖を訪れた。現地の城や教会などでは、ガイドによるドイツ語の説明を受け派遣先であるフライブルク周辺の歴史を知ることが出来た。

わずかヶ月ばかりの短期留学で自身の文法やリスニング、スピーキングを含んだドイツ語能力が目を見張るほど成長するとは勿論考えてはいなかったが、それでもわずかばかりとはいえ着実に向上したと考えられる。また何よりも、他の参加者から得られたドイツ語に対する積極的な姿勢こそが一番の成果といえるかもしれない。

**(3)今後の研究の展望**

私の扱う研究対象がドイツ語テキストである以上、ドイツ語を読むということが必要不可欠であり、その意味で今回のコース参加で得られたドイツ語の知識をそこに応用していきたい。特に扱う対象を演劇としているので、今回は叶わなかったが実際に観劇もしたい。そのためには、読むだ

けでなく聞き取る力も必要であり、それもこれから付けていきたい。

今回の育成プログラムへの参加により得られた能力や視点をもとに、来年度以降の卒業論文を完成させたい。